

唐様前夜

林羅山とそのコミュニティ

セントリーー赤尾コレクションより

出品リスト List of Works

* CEN= 慶應義塾（センチュリー赤尾コレクション）Keio University (Century Akao Collection)

	作品名 Title	作者等 Creator	制作年 Date	材質等 Material	所蔵 Collection
1	藤原惺窩筆和歌 Waka Poem by FUJIWARA Seika	藤原惺窩 FUJIWARA Seika	元和 4 年（1618） 1618	紙本墨書 Ink on paper	CEN ㊦ 2444 AW-CEN-002444-0000
2	藤原惺窩筆七言絶句 Seven-Character Quatrain by FUJIWARA Seika	藤原惺窩 FUJIWARA Seika	文禄 2 年（1593）？ 1593?	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection
3	林羅山筆元旦試毫 New Year Calligraphy by HAYASHI Razan	林羅山 HAYASHI Razan	慶安元年（1648） 1648	紙本墨書 Ink on paper	CEN ㊦ 134 AW-CEN-000134-0000
4	林羅山筆和歌懷紙 Waka Poem by HAYASHI Razan	林羅山 HAYASHI Razan	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	CEN ㊦ 740 AW-CEN-000740-0000
5	林羅山筆書状 Letter by HAYASHI Razan	林羅山 HAYASHI Razan	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	CEN ㊦ 2453 AW-CEN-002453-0000
6	林鷺峰筆詩懷紙 Poem by HAYASHI Gahō	林鷺峰 HAYASHI Gahō	承応 2 年（1653） 1653	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection
7	随筆四十六則 Essay of 46 Chapters (Zuihitsu Sijūrokusoku)	林羅山 HAYASHI Razan	正保元年（1644） 1644	紙本墨書 Ink on paper	斯道文庫 092/ト101/1 Keio Institute of Oriental Classics (Shido Bunko)
8	儒林墨宝第一集 First Volume of Collection of Calligraphy Works by Confucian Scholars (Jurin Bokuhō)	榭原月堂編 SAKAKIBARA Getsudō (edit)	天保 12 年（1841） 1841	紙本木版刷 Paper, woodblock print	個人蔵 Private Collection
9	偃戈園十景詩 Poems on the Ten Views from En'kaen Garden (En'kaen Jikkeishi)	林梅洞、林鳳岡他 HAYASHI Baidō, Hōkō et. al.	寛文 3 年（1663） 1663	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection
10	古澗慈稽筆詩短冊 Poem Strip by Kokan Jikei	古澗慈稽 Kokan Jikei	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection
11	堀杏庵筆詩短冊 Poem Strip by HORI Kyōan	堀杏庵 HORI Kyōan	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection
12	松永尺五筆詩短冊 Poem Strip by MATSUNAGA Sekigo	松永尺五 MATSUNAGA Sekigo	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection
13	林東舟筆和歌短冊 Waka Poem Strip by HAYASHI Tōshū	林東舟 HAYASHI Tōshū	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection
14	那波活所筆七言絶句 Seven-Character Quatrain by NABA Kassho	那波活所 NABA Kassho	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	CEN ㊦ 764 AW-CEN-000764-0000
15	葡萄図 Grapes	松花堂昭乗筆、 石川丈山賛 SHOKADO Shōjō (drawing), ISHIKAWA Jōzan (inscription)	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	CEN ㊦ 110 AW-CEN-000110-0000
16	脇坂安元書簡 Letter by WAKISAKA Yasumoto	脇坂安元 WAKISAKA Yasumoto	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection
17	黒川道祐筆詩懷紙 Poem by KUROKAWA Dōyū	黒川道祐 KUROKAWA Dōyū	江戸時代（17 世紀） Edo period (17th century)	紙本墨書 Ink on paper	個人蔵 Private Collection

唐様前夜

林羅山とそのコミュニティ

センチュリー赤尾コレクションより

林羅山（1583—1657。法名、道春。別号、夕顔巷など）は、京都の町人の家に生まれ、五山の

一つ建仁寺で学問修行を行った後、藤原惺窩に入門、最新の儒学を身につけ、徳川家康に仕えて蔵書の管理をしながらさまざまな啓蒙的な著作をものしてゆきます。家康の没後も二代秀忠、三代家光、四代家綱まで現役の学者として幕府の文教政策に深く関与します。子の鷲峰・読耕齋も幕府儒官として活躍、そのほか多数の学者を育て、また大名や京都在住の学者たちとも頻繁に詩文のやりとりなどを通じて交流し、それまでなかった新たな知的コミュニティを形成していきます。今回の展示は、そういった交流の中から生み出された漢詩や和歌の作品を、文学テキストとして、また書道作品として味わっていただくというものです。登場するのは、師である古澗慈稽（10）・藤原惺窩（1・2）、弟の東舟（13）、子の鷲峰（6・8）、孫の梅洞・鳳岡（8・9）、門人の人見竹洞・坂井漸軒（9）、兄弟弟子であり友人でもある堀杏庵（11）・松永尺五（12）・那波活所（8・14）・石川丈山（8・15）、友人の脇坂安元（16）、

二代にわたる門人かつ友人の黒川道祐（17）です。

江戸時代の漢詩人・漢学者の書は一般に「唐様」つまり中国風と言われていて、これはそれまでの「漢」の担い手だった五山僧たちとは異なる、明代の新しい中国の書を学んだ書風であることを示すものですが、普通は17世紀後半以降、黄檗宗の中国人僧侶や、中国から輸入された書道手本などの影響が顕著になる時代以降のものを指しており、羅山の活躍した17世紀前半は、その前夜ともいえるべき状況かと想像されます。この時代、学問的には五山からの脱却を目指した学者たちが、書においてはどのような個性を発揮していたのか、そういった視点からも彼らの作品を見て頂けると、いっそう興味が深まるかと思えます。

凡例

解説には、作者の略伝、作品の概要、書風、伝来などを記した。翻刻は原文の改行を「」で示し、通行字体を用い、句読点・濁点を補った。

1 藤原惺窩筆 和歌

1 幅

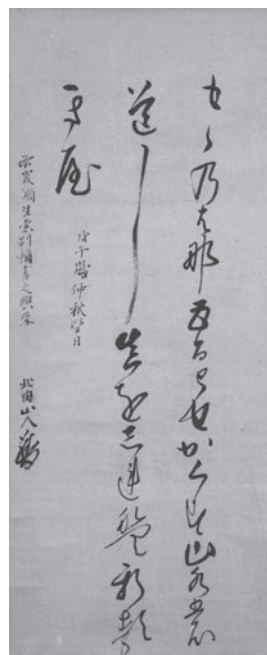
羅山にとって儒学への道を開いた恩師である藤原惺窩（1561-1619、別号 北肉山人）は、歌道の家として知られる下冷泉家の出身で、所領のあつた播磨で生まれ、上京して相国寺の禅僧となるが、捕虜として日本に抑留されていた朝鮮の儒学者羌沆に朱子学を学び、学者として自立を果たした。徳川家康に招かれたが辞退し、代わりに羅山を推薦した。漢詩・和歌ともに得意で、没後羅山らの編になる『惺窩文集』、子孫の編になる『惺窩先生文集』ともに漢詩文と和歌を収める。

この和歌は弟子の武田蒙庵（1596-1659、字を崑淵という）23歳の元和4年（1618）に、その号「蒙庵」を授けたときに詠んだもので、両書にも収める。「蒙」は易の卦のひとつで、山の下に水が湧き出て大河となっていくのを見て君子は自らを励ます、と概括される。これと、陶淵明「桃花源詩」の「奇蹤隱五百、一朝敵神界」（始皇帝の暴政を逃れ桃花源に隠れ住んだ人々のことが、ある漁師が川を遡ったことで、五百年ぶりに明らかになった）を踏まえ、「五百年にわたって桃の花に隠された山中の別世界も、そこへ通じる川を知ってさかのぼればたどり着く、お前もそのような真実の道を知ろうと学問に励みなさい」と励ます。後世の説話で

はこの漁師の名が黄道真と呼ばれており、第四句「道し真を」に名前の子を詠み込む。

もともと和歌は懷紙・短冊・色紙などに書くものであって、こういう大きな紙面に書かれるものではない。禅僧が弟子に道号を授けるときに、そのいわれを詩に詠む道号頌や漢文に記す字説といった作品を和歌に置き換えて揮毫したものであろう。出自である五山文学からの意図的変容と見えようか。しかし書風は伝統的な仮名とも、五山僧の細く癖のある線質とも異なるもので、字形よりも勢いや線の変化の面白さを重視した書である。なお、四十歳代から中風で右手が思うように使えなかったらしいが、その不自由さがかえって味のある線を生み出しているかもしれない。幕末、酔墨齋なる人物が武田氏子孫から譲り受け、その後富岡鉄斎所蔵となった。

もゝのはな五百とせかくす山水も」道し真をすればしる」きや
戊子歲仲秋望日」右崑淵生索別称書之与焉 北肉山人（花押）



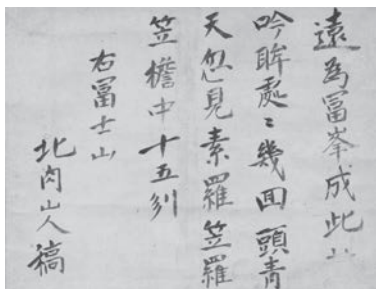
2 藤原惺窩筆 七言絶句

1 幅 個人蔵

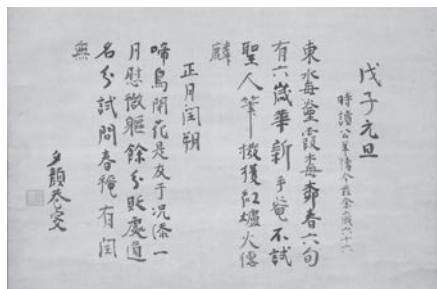
文禄2年(1593)、徳川家康の招請に
応じて江戸に下向したとき、その道中で富
士山を見て詠んだ詩。二種の『文集』とも
に収める。一行目末尾に料紙の欠損がある
が、『文集』により「遊」と判明する。「遠
くから旅してきたのは富士山を見るため
だった。見える場所ごとに幾度も振り返
る。青空に鮮やかに映える白絹の笠のよう
な姿、その笠の中には十五もの国がすっぽ
り収まっている」。富士山を詠む詩は、五
山僧たちも大量に作っているが、笠に見立
てるのはユニークで、石川丈山が扇に見立
てた有名な詩の先駆けとも言えよう。やや
ふくらみのある穏やかな書で、線質は1と
通じるところがある。

明治14年宮原節庵・明治15年寺西易堂の
題跋(鑑定書兼鑑賞文)を併せて別幅に仕立
てて添える。

遠為富峯成此「遊」一吟眸処々
幾回頭、青「天忽見素羅笠、羅」
笠檐中十五州「右富士山」北肉
山人稿



2



3

3 林羅山筆元旦試毫

1 幅

「戊子」すなわち慶安元年(1648)の元旦および閏正月一日
に詠んだ七言絶句各一首を一枚の懷紙にしたためたもの。元旦
詠は、66歳という年齢と、ちょうどそのとき読んでいた経書の
『春秋公羊伝』の内容を詠み込む。『公羊伝』は獲麟(薪を取る者が、
太平の世に出現するとされる靈獸の麒麟を捕らえた)という記事を末尾に
置き、漢代にはこれが高祖劉邦の出現を予言したものと解釈された。
漢は五行説により火の徳を持つとされ、薪と火徳とが結びつけられ
たのである。「孔子はそうように歴史を予言したが、私はせいぜい囲
炉裏でかじかんた手をあぶっているだけ」という自嘲を述べる。閏正月
のほうも、閏月のおかげで正月に春らしい雰囲気を味わえた喜びを述
べ、『公羊伝』は名分を正し、余分なものを厳しく否定するが、閏月
という余分はそこにもあるではないか、と茶化している。『羅山林先生
詩集』所収本文と少し異同がある。

横線や右払いの終筆を明確に止めず、やや開き気味に抜くような
筆さばき、また、縦線が途中で少し細まってやや屈曲したり、最終
画をアンバランスなほど伸ばしたりする、楷書としては不安定さを
感じさせる構成は独特のもので、一見稚拙に見えるこれらの特徴は、
隷書の書法、藤原定家に発する定家様などの影響が考えられる。

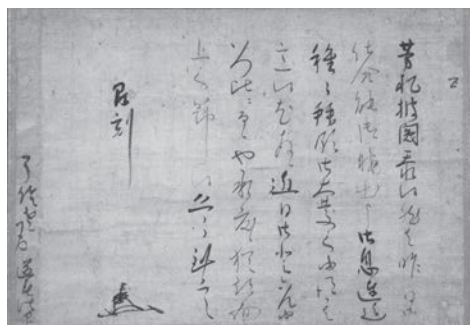
戊子元旦「時読公羊伝、今茲余歳六十六」東海煙霞梅柳春、
六句「有六歳華新、手亀不試」聖人筆、撥獲紅爐火徳「麟」
正月閏朔「啼鳥開花是友于、況添一月慰微軀、余分貶処道」
名分、試問春秋夕閏「無」夕顔巻叟「印」羅山

4 林羅山筆 和歌懷紙

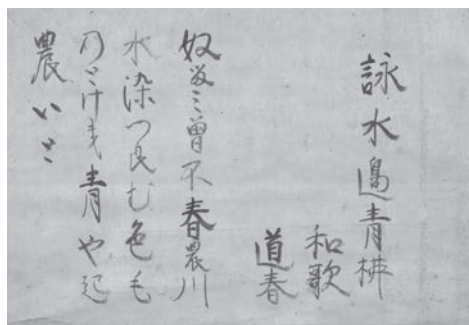
1 幅

3 に対して、こちらは和歌を詠んだもの。惺窩に比べれば少ないものの、和歌作品も残されており、『羅山林先生外集』（国立公文書館蔵写本）に収められるが、本作品はない。早春、川べりの柳が芽吹いた様子を詠んだ題詠歌で、柳を糸に見立てて、「ようやく暖かくなってきた川の水に染められたのだろうか、春ののどけさを感じさせる緑色になった」と詠む。万葉書（仮名をもとの漢字のままに記すもの）を交えた、三行三字の和歌懷紙の定型を守った書式であるが、全体にかすれ気味で変化に乏しく、3 に比べて見応えに欠けるところがある。

詠水辺青柳「和歌」道春「ぬるみ
そふ春の川」水染つらむ色も」の
どけき青やぎ」のいと



5



4

5 林羅山筆 書狀

1 幅

筆跡鑑定を家業とした古筆家の初代了佐（1572-1662）に宛てた書状である。このような日常的な筆跡においては、3・4 に見られたような特徴的な書風を示す場合と示さない場合とがあるが、本書状はかなり特徴を表したものである。内容は、了佐が子息たちを連れて江戸に下り將軍あるいは幕府重臣に拝謁したときのことを羅山に報告した書状への返事で、首尾良く終わったことを喜んでいる。了佐の子のうち一人は別家を立て、その二代目から幕府に仕えることになる。本家は京都で存続し、明治維新後東京に移住、その家に残された膨大な鑑定関係の資料が、現在センチュリー赤尾コレクションに伝わる。箱と表装裏側に本家十代古筆了伴の極が直書され、他に十三代了信の極札が附属する。

以上「芳札披閱忝候。然者昨日御」仕合能
御暇出申候。御息達迄」種々拝領、御大慶
之由得其意候。尤存候。近日御登候ハん由、「
いつ比ニ而候や、承度候。猶期面」上之節候。
恐々謹言」即刻 道春（花押）」了佐老御報
道春法印

6 林鷺峰筆 詩懷紙

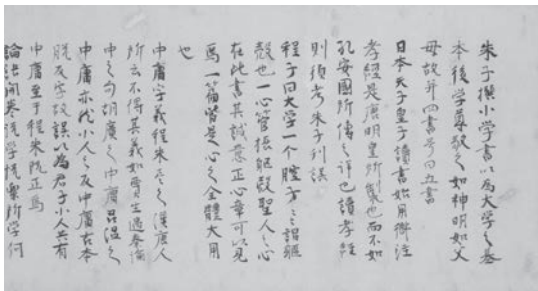
1 幅 個人蔵

林鷺峰（1618-1680）は羅山の三男。別号、向陽子。兄二人が早世、家督を継ぎ、『本朝通鑑』を完成させるなどの事業を成し遂げ、その過程で多くの門人を育てた。また王朝漢詩文のアンソロジー『本朝一人一首』などを執筆、日本漢文学史上にも大きな足跡を残した。その漢詩文を集めた『鷺峰全集』は詩・文各120巻に上る膨大なもので、大名や学者など同時代の文化人との交流が反映されている。

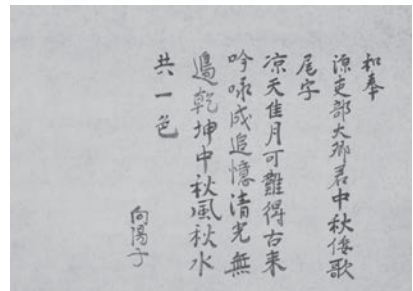
本作品はその詩集『鷺峰先生林学士詩集』巻31所収、承応2年（1653）の作であると知られる。「源吏部大卿」は武家歌人として、また善本の収集でも知られた姫路藩主榊原忠次（1605-1665、官職名は式部大輔）で、その家集『二掬集』（上越市立歴史博物館寄託「榊原家史料」のうち）の同年部分に「八月十五夜の月くまなかりしかば、来しかたながめ待るには稀なる光と覚えて／それとなき世々の今宵の影までも一つに見する月の色かな」とある歌の末尾「色」を韻字として詠んだもの。「来しかた」「世々」といった表現に第二句「追憶を成す」が応答している。第四句は『古文真宝後集』所収、王勃「滕王閣序」の「秋水共長天一色」を踏まえる。『詩集』によると、父の羅山、子の梅洞と一緒に忠次邸での月見の宴に参加したときの詠で、このとき11歳だった梅洞も初めて詩を詠んだという。

羅山周辺で唯一、羅山風の書を継承しているのが鷺峰であるが、父と比較するとややゆつたりとしてなめらかな線質で、その分変化には乏しい。

和奉「源吏部大卿君中秋倭歌」尾字「涼天佳月可難得、古来」吟咏
成追憶、清光無「辺乾坤中、秋風秋水」共「色」向陽子



7



6

7 随筆四十六則

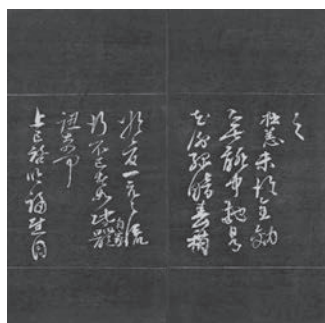
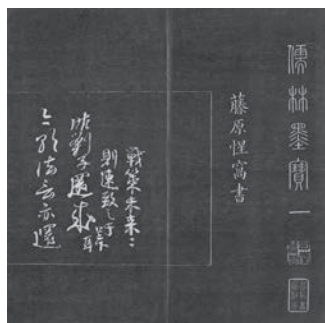
1 幅

羅山の文集『羅山林先生文集』巻73、四男の読耕斎に授けた「随筆」の一部で、46の短い文章からなるため、後人がこのように名付けたもの。全篇乱れることなく、しかし3などに比べると行書・草書体も交えてスピーディーに記された自筆本である。末尾に「甲申之冬 羅浮老夫書」とあって、正保元年（1644）に書かれたものとわかる。儒学的主要經典に始まり、老子・莊子・楚辞・史記・漢書・後漢書や六朝から唐宋にかけての詩文、辞書類など、読んでおくべき書物、知っておくべき知識を体系的に述べていて、この年20歳であった読耕斎へ、今後の学問の進展を期待する内容になっている。

8 儒林墨宝 第一集

1 帖 個人蔵

幕臣榊原月堂（1798-1858）の編になる、近世儒学者の自筆資料模刻本。天保12年（1841）刊。拓本と同様の正面摺という方法で白抜きの文字が印刷されている。全四集が順次刊行され、第二集以下にはそれぞれ木下順庵門下・水戸彰考館関係者・荻生徂徠門下が収められている。本書第一集は、藤原惺窩から始まって林家の代々やその周辺の学者の筆跡を収める。冒頭は羅山宛の藤原惺窩漢文体書簡で、二種の『文集』に収めるほか、自筆原本が戦前まで存在し、土肥慶蔵所蔵時に『大日本史料』第12編31に採録されている。梅洞・鳳岡兄弟の筆蹟も収めるが、9とは異なり、梅洞がやや鷲峰風、鳳岡が9の梅洞風の筆致を見せる。

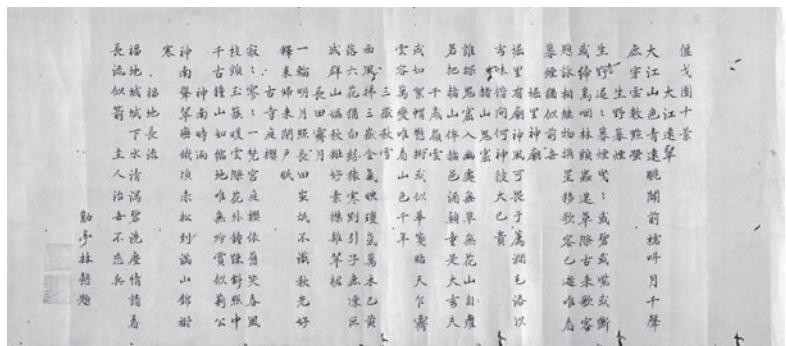


8

9 偃戈園十景詩

2 軸 個人蔵

鷲峰長男の梅洞（1643-1666、名、懋、別号、勉亭）、次男で家督を継いだ鳳岡（1645-1732、名、懋、別号、優亭）、羅山門人で鷲峰の私塾を支えた人見竹洞、坂井漸軒（別号、蘭齋）の四人が、当時丹波福知山藩主だった、後の肥前島原藩主松平忠房（1619-1700）の依頼で、福知山の自邸の庭園偃戈園から見える風景を10選んだ「偃戈園十景」を詩に詠んだもの。寛文3年（1663）の成立。この作品における梅洞の筆跡は、おそらく細い筆を用いたものと思われるが、繊細かつ鋭いもので、羅山・鷲峰と著しい対照を成す。鳳岡はややゆつたりとしているが、祖父・父と継承されたような特徴はほぼ失われている。



9

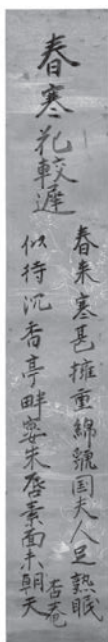
11 堀香庵 詩短冊

1 幅 個人蔵

堀香庵（1585-1643）は近江出身の医師、藤原惺窩に儒学を学び、広島浅野家（移封前は和歌山）に仕えた後、尾張藩にも仕えた。京都に本拠地があり、代々儒医として学問を伝えている。

本作品は掛け軸に表装された短冊で、金泥にて霞や草花の下絵が施されている。「春寒くして花較や遅し」という題を詠む題詠詩で、詩文集『杏陰集』（陽明文庫蔵写本）巻5に収める。制作年代は不明だが、おそらく晩年10年ほどの作であろう。楊貴妃の姉の號国夫人がわがままで、また美貌を恃んで化粧もしなかった、といった逸話を踏まえ、「まだまだ寒い早春、綿布団を重ねてぐすり眠っている。玄宗と楊貴妃が宮殿の沈香亭で宴会を開くまで待っていようというのか、すっぱんのまま、まだ拝謁にも来ない」と詠む。題を直接表現せず、すべて夫人の行動を描いて、開花が遅いことの比喩としたもの。沈香亭は牡丹を愛でる場所だったようなので、「朱唇」「素面」は牡丹の紅白を意味するかもしれない。書風は穏やかで整っており（言いかえれば特に個性的ではなく）、温厚な人柄をよく反映している。初代朝倉茂入と前田香雪の極札が附属する。

春寒花較遅「春寒甚擁重綿、號国夫人足熟眠、」似待沈香亭
畔宴、朱唇素面未朝天」杏庵



11

12 松永尺五 詩短冊

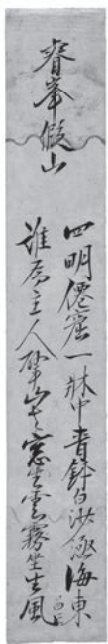
1 枚 個人蔵

松永尺五（1592-1657、名、昌三）は貞門俳諧の祖として知られる松永貞徳の子で、貞徳の祖母が惺窩の祖父の姉という遠縁に当たる。羅山の紹介で惺窩に入門、その後私塾を開き、公家・武家の多数の招聘に応じて講義も行うなど、京都における儒学の第一人者であった。

本作品は写本で伝わる詩文集『尺五先生全書』（国立国会図書館蔵）巻4に「題友人之比叡仮山」という題で収められている。仮山はいわゆる箱庭のように、石や砂、苔や草などを用いて立体の山水画を描くもので、現在は盆景あるいは盆山と呼ぶのが普通のものである。中世の五山でも賞翫されており、近世も引き続き盛んだった。この詩の場合は比叡山という実景を写したもののようで、「誰が深山幽谷を引きちぎって机の上に持ってきたのか、まるで部屋全体が山中のように雲や霧に覆われ風が吹いてきたかのようだ」と述べる。

11に比べると鋭く細い線で、やや縦長の字形、左右の払いを長く伸ばすなど、大胆な筆遣いが見られるが、五山風に屈曲することはなく、素直な線質。嘉右衛門の極札が裏に貼付されている。

叡峰仮山「四明僊窟一床中、青鉢白沙涵海東、」誰為主人擘山去、
窓生雲霧坐生風」昌三



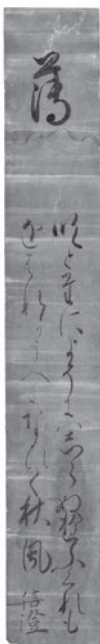
12

13 林東舟和歌短冊

1枚 個人蔵

林東舟（1585-1638）は羅山の実弟。名、信澄。のぶすみ 法名、永喜。えいき 羅山が父の兄の家の養子となったため、実家を継いで儒官として幕府に仕えた。和歌も得意とし、林家一門の文雅の会では和歌・連歌等の作者として参加していることが多い。本作品は内墨料紙に金泥霞下絵を施した短冊に、和様の流麗な筆跡でしたためられている。「吹いているのかどうかわからないくらいのかすかな風も、尾花がなびくことでそれとわかる、秋の夕暮れ」という内容。スキキのはかなげな様がよく出ている。

薄「吹とだによそにはしらぬゆ
ふぐれも」をばながうへになび
く秋風 信澄



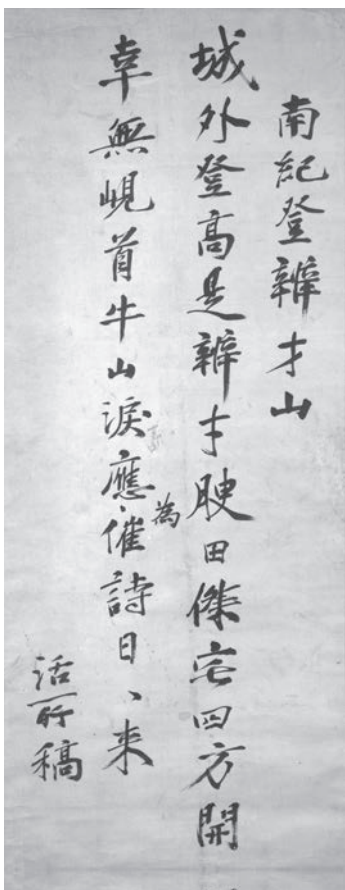
13

14 那波活所筆七言絶句

1幅

那波活所（1595-1648）は、羅山・堀杏庵・松永尺五ともに惺窩門の四天王とされる学者で、古活字版『白氏文集』『和名類聚抄』の刊行でも知られる。紀州徳川家に仕えた。本作品はその紀州において、和歌山郊外の弁財天山に登って詠んだ詩。詩文集『活所遺藁』巻6に「登弁才山」の題で収める。「豊かな田畑や藩士たちの邸宅を見晴らして、かつて中国では峴首山や牛山に登って人生の無常を悲しんだ人たちがいたが、私はそういうこともなく、日々好きな詩を作るためここに来るのだ」と述べる。書は、やや横長のフォルムで、縦横にすっきりと通った線質がすがすがしい。どこことなく惺窩に似ているが、それをさらに力強くした雰囲気がある。第四句「為」を書き落として後から補入しているが、揮毫作品にはときどき見られ、これがあるからといって必ずしも未完成あるいは下書きということではない。

南紀登弁才山「城外登高是辨才、腴田傑宅四方開、」幸無峴首牛山涙、応為催詩日々来」
活所稿



14

15 松花堂昭乗筆葡萄図・石川丈山賛

1 幅



15

石川丈山（1583-1672、別号六々山人）はこの時期を代表する漢詩人の一人で、書家としても特に隸書体を得意としたことで知られる。もともと徳川家康に仕えた武将であるが、大坂夏の陣の後、牢人となり京都で藤原惺窩に学ぶ。その後広島浅野家に仕えるが、母の死後京都に戻り、現在詩仙堂として知られる洛北一乗寺に隠棲、当時の京都文化人と広く交流した。特に絵の作者である松花堂昭乗（1582-1639、石清水八幡宮に所属する僧侶で、書は本阿弥光悦・近衛信尹とともに寛永の三筆と称される）とは親しかったようである。

葡萄は縁起の良い画題（多産の象徴）として中国・朝鮮で親しまれてきたもので、日本でも伊藤若冲が好んで描いたことが知られる。多くは

力強い枝や伸びた蔓に生命力を託す描き方だが、本作品はむしろ丈山の書を主役としているのか、薄墨で下方にまとめて小さく描かれている。丈山の記した七言二句は、明の詩人、馮琦（1558-1603）の七言律詩「葡萄」の第五・六句を摘句したもの。紫色の房のような実が雨に潤っていつそう粒立ち、緑色の幕のような葉が風に揺られてまばらになっている、というもので、的確な描写である。

（印「三陽泉郷人石川重之」）的々紫房含 雨潤疎々翠 輻向風開 六々山人書（印「六六山洞／凹凸窠夫」）

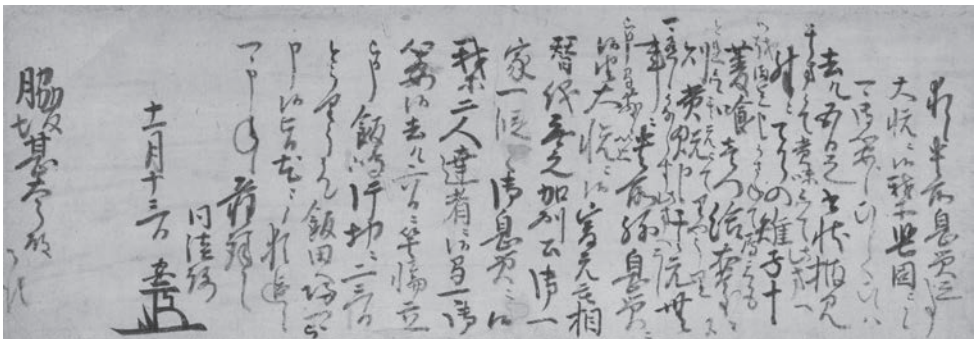
16 脇坂安元書簡

1 幅 個人蔵

脇坂安元（1584-1654）は賤ヶ岳七本槍の一人として知られる脇坂安治の子で、家督を継いで淡路洲本藩主、転封して信濃飯田藩主となった。官職は淡路守。羅山と親密で、和歌・漢詩のやりとり、歌書など典籍の貸し借り、といった文雅の交流があった。鷲峰と榊原忠次（6）・松平忠房（7）との関係によく似ている。

本書簡は、幕府重臣堀田正盛の子で安元の養子であった安政（1633-1694、通称甚太郎）に宛てたもので、鷹狩りの様子を伝えた安政書簡への返事。文中の「加州公」は加賀守だった美父正盛のこと。安元は江戸にいたか。「箕輪」「飯嶋」「片切」はいずれも飯田の北方に位置する伊那谷の地名で、そのあたりが鷹狩の場所だったのであろう。安政はまだ若年だったのであろうか、筆遣いも文言もゆつたりと丁寧に記されている。

（追伸部分）猶々貴所息災之事 大悦ニ候。我等堅固ニ候。可御心安候。ひしくひハ其方にて賞味候ハ此方へ御越満足申候。かさねて雁ニても」とれ候ハ、其元ニてりやうり」可有之候。かならず此方へこし被申間敷候。以上（本文部分）去ル五日之書状披見」殊ニてがらの雉子十」菱喰老」給、大慶ニ候。則賞翫申候。其元無事ニ、貴所様息災ニ」候由、大悦ニ候。爰元無相」替儀無之、加州公御一」家一段と御息災ニ候。」我等二人達者ニ候間、可御」心安候。去ル六日ニ箕輪立」被申、飯嶋片切ニ二三日」とうりう候て、飯田へ帰郷可」申候旨、尤ニ候。猶追々」可申承候。恐惶謹言」十一月十六日（同淡路）安（花押）」脇坂甚太郎殿御報



17 黒川道祐詩懷紙

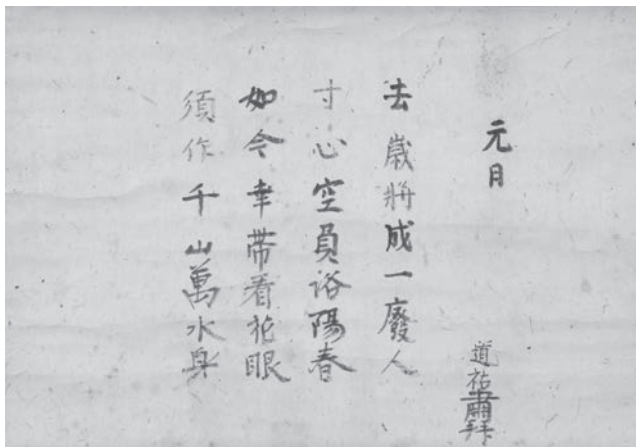
1 幅 個人蔵

黒川道祐（1623-1691）は京都の医師黒川寿閑を父に、堀杏庵（11）の娘を母に持つ。京都に住みながら広島藩に仕え、本業の医学のかたわら、『雍州府志』『日次紀事』という京都の地理歴史・年中行事を記した大著を残した。羅山・鷺峰二代にわたって親交があり、斯道文庫には、道祐の依頼により鷺峰・梅洞・鳳岡および門人たちが合作した詩巻『静庵佳勝景境詩并序』（092/ト105/1）もある（7ととも）に『文人の書と書物』に収める。

本作品は道祐自身の漢詩作品という珍しいもので、1と同様元旦試筆詩である。昨年は廃人になりかけた、という悲痛な第一句からは、延宝元年（1673）の火災で自宅を焼失してしまっただけという事件が連想されるが、その翌年の作かどうか明証はない。あるいは大病をした翌年だったか。第四句は、『聯珠詩格』という唐宋詩のアンソロジーに載る古師老「放猿」詩の「放爾千山万水身」を踏まえ、野生の猿が自由

に野山を駆けまわるようにほできないが、せめて自分の目で野山の花を見て自由な心を取り戻したい、と述べる。漢詩や和歌の懷紙としてよく用いられる、ごわごわした厚手の楮紙を料紙としているため、運筆がスムーズではないところがあるが、非常に素朴な書きぶりのなかに「人」「春」「眼」の右払いなど、かすかに羅山風の筆遣いを見せている。箱書きは日本書道史研究者、陽明文庫主事の小笹喜三。箱内に、昭和33年以文会（京都大学文学部同窓会）例会にて小笹が行った「江戸初期儒学家手蹟」展の一枚刷目録があり、本作品も出品されている。

元旦 道祐肅拜「去歲將成一廢人」
寸心空負洛陽春、如今幸帶看花
眼、須作千山万水身



参考文献

- 国民精神文化研究所編『藤原惺窩集』（編者刊、1938-39、思文閣出版覆刻、1978）
- 太田青丘『藤原惺窩』（人物叢書185、吉川弘文館、1985）
- 京都史蹟会編『林羅山先生文集・詩集』（平安考古学会1918-21、ベリカン社覆刻、1979）
- 鈴木健一『林羅山年譜稿』（ベリカン社、1999）
- 鈴木健一『林羅山 書を読み未だ倦まず』（ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、2012）
- 伊藤善隆『初期林家林門の文学』（古典ライブラリー、2020）* 羅山が梅洞に与えた詩の自筆作品、東舟の和歌懷紙など貴重な資料の紹介がある。
- 揖斐高『江戸幕府と儒者 林羅山・鷲峰・鳳岡三代の闘い』（中公新書2273、中央公論新社、2014）
- 廣木一人編『榊原家の文芸 忠次・政房・政邦』（科学研究費補助金（基盤研究（B）研究成果報告書 平成25年度・平成28年度 近世大名榊原家の文芸の総合的研究）*「掬集」翻刻を収録。
- 鈴木健一「堀杏庵年譜稿」（学習院大学人文科学研究所「人文」17、2019・3）
- 徳田武編・解説『尺五堂先生全集』（近世儒家文集集成11、ベリカン社、2000）
- 小松茂美編『日本書蹟大観』19（講談社、1979）* 作品17の図版・解説を収録。
- 堀川貴司「五山禅僧の教養―古潤慈稽を例に―」（鈴木健一編『形成される教養十七世紀日本の「知」』（勉誠出版、2015）
- 堀川貴司解説『2020年度センチュリー文化財団寄託品展覧会 文人の書』（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 慶應義塾大学アート・センター、2020）* 作品3の図版・解説を収録。
- 堀川貴司監修『第34回慶應義塾図書館貴重書展示会 文人の書と書物―江戸時代の漢詩文に遊ぶ―』（慶應義塾図書館、2022）* 作品7の図版・解説を収録。
- 堀川貴司「斯道文庫所在林羅山自筆書簡筆跡類について」（『藝文研究』123、2022・12）* 作品3・5・7の書誌・翻刻を収録。

展覧会

唐様前夜：林羅山とそのコミュニティ
センチュリー赤尾コレクションより
(KeMCo 新春展 2024 龍の翔る空き地 特別企画)

2024年1月10日(水) - 2月9日(金)
慶應義塾ミュージアム・コモンズ
主催 | 慶應義塾ミュージアム・コモンズ、
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫

カタログ

『唐様前夜：林羅山とそのコミュニティ センチュリー赤尾コレクションより』

執筆 | 堀川貴司（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）
編集 | 慶應義塾ミュージアム・コモンズ
(本間友、松谷美実、笹本亜実、稲田穂香)

発行 | 慶應義塾ミュージアム・コモンズ
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
Tel. 03-5427-2021 Fax. 03-5427-2022
hello@kemco.keio.ac.jp <https://kemco.keio.ac.jp/>

Exhibition

Daybreak of Chinese Style Calligraphy in Premodern Japan: Hayashi Razan and his Community, From Century Akao Collection (Special feature in "KeMCo New Year Exhibition 2024 Where the Dragons Are")

Wednesday January 10 to Friday February 9, 2024
Keio Museum Commons
Organised by Keio Museum Commons and Keio Institute of Oriental Classics (Shido Bunko)

Brochure

Daybreak of Chinese Style Calligraphy in Premodern Japan: Hayashi Razan and his Community, From Century Akao Collection

Written by Takashi Horikawa (Shido Bunko)
Edited by Keio Museum Commons (Yu Homma, Fumi Matsuya, Ami Sasamoto and Honoka Inada)

Published by Keio Museum Commons
2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345, Japan
<https://kemco.keio.ac.jp/hello@kemco.keio.ac.jp>

KeMCo Exh. 11 KeMCo Brochures 3 ISSN 2758-5786(Print)

KeMCo Brochures 3 ISSN 2758-5786